

第7回

第2章 人間としての自覚—哲学・宗教・芸術

プラトン ～永遠への憧れ～

今回学ぶこと

プラトンの考え方を、まずソクラテスから受け継いだ課題としてとらえ、アイデア論や理想国家論を理解する。また、プラトンの思想が理想主義といわれることについて、それはどういう意味か、彼の考え方にどのように現れているかを考え、後の時代に及ぼした影響について理解する。



講師

和田倫明

■ ■ アイデアとは何か ■ ■

ソクラテスの言葉を、対話篇として残したプラトンは、自らの思想も発展させた。ソクラテスは、人々が徳について無知であることを明らかにしていったが、一方で、徳に従った生き方を大切にした。

善とは何か知らないのに、善く生きることができるのだろうか。プラトンは、われわれの魂・精神（プシケー）はアイデアの世界からやってきたもので、そこには善そのもの＝善のアイデアがあって、それを本当は知っているのだという。しかし肉体の牢獄にとらわれた魂・精神は、この世＝現象界の「善いものごと」に触れることで、「善のアイデア」を思い出そうとし、強く憧れる。その憧れ＝エロスの働きにより、アイデアを求めようとすることが哲学なのである。

■ ■ 哲人政治と理想国家 ■ ■

ソクラテスはアテネの民主政治のもとで死刑となった。プラトンは、そのようなことが起こらない、理想の国家を求めた。そのためには、魂・精神の三部分説に基づいて、国家の欲望（情欲）的部分である庶民が節制の徳を、国家の意志（気概）的部分である兵士が勇気の徳を、国家の理性的部分である支配者が知恵の徳を発揮することで、国家は全体として正義の国家となると考えた。そのためには国民すべてが教育を受けて選別を受け、もっともすぐれた人々が、知恵の中の知恵である哲学を学び、最高の一人が哲人王となる必要があるとした。

■ ■ プラトン哲学の特徴 ■ ■

プラトン哲学は、理想主義の哲学といわれる。イデアとは、まさにその理想という意味である。イデアの世界というものを考えたり、哲人王が支配する理想国家を考えたり、そこだけを見ると、ありえないことを求めているかのように見える。しかし、物事を根底から考え直し、すべてを満足させる根本的な原理を求める考え方というのは、決しておかしいものではなく、科学の世界でも重要なやり方である。プラトンは現実の世界を冷静に評価したうえで、社会や人間、ものごとの在るべき姿、本当の在り方を考え直した。このような考え方は、後の時代に大きな影響を与えた。

◇ コラム ◇

プラトニック・ラブ（プラトンの恋愛）という言葉があり、精神的な恋愛という意味で使われることがあるが、ルネサンス時代にプラトンの思想が紹介された時に使われたのが始まりらしく、プラトン本来の思想とは異なる。プラトンにとって最も重要なのは、イデアに向かうエロスである。